

本日よりこと

- ① ベクトル解析
 - 場の解析

ベクトル解析

場の解析

スカラー場の勾配

スカラー場 $P \mapsto f(P)$ は P の座標 (x, y, z) を使うと 3 変数関数とみなせるので x, y, z で偏微分ができる.

$$P(x, y, z) \mapsto \left(\frac{\partial f}{\partial x}, \frac{\partial f}{\partial y}, \frac{\partial f}{\partial z} \right)$$

で決まるベクトル場をスカラー場 f の勾配 (gradient) と呼び

$$\operatorname{grad} f, \operatorname{grad} f(P), \operatorname{grad} f(x, y, z)$$

などの記号で表す.

ベクトル解析

場の解析

ハミルトン演算子と勾配

形式的記号

$$\nabla = \left(\frac{\partial}{\partial x}, \frac{\partial}{\partial y}, \frac{\partial}{\partial z} \right)$$

をハミルトン (Hamilton) 演算子またはナブラ (nabla) と呼ぶ。
これらを用いると $\text{grad} f$ は

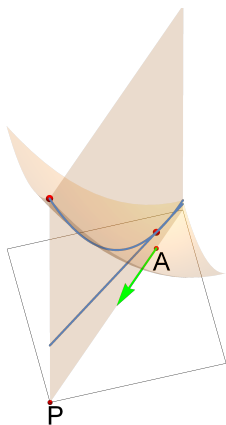
$$\text{grad} f = \left(\frac{\partial}{\partial x}, \frac{\partial}{\partial y}, \frac{\partial}{\partial z} \right) f = \nabla f$$

とかける。

ベクトル解析

復習：方向微分

復習：2変数関数の方向微分係数の定義



$z = f(x, y)$: 2変数関数

$A(a, b)$: xy 平面の定点.

\vec{u} : xy 平面の大きさ1のベクトル.

動点 $P(x, y)$ を A から \vec{u} 方向に動かすと

$$\vec{AP} = s\vec{u}, \quad s \text{ は実数のパラメータ}$$

と表される.

$$\lim_{s \rightarrow 0} \frac{f(P) - f(A)}{s}$$

が存在するとき $f(x, y)$ の点 $A(a, b)$ における \vec{u} 方向微分係数と呼ぶ. (ただし, $f(P)$, $f(A)$ はそれぞれ $f(x, y)$, $f(a, b)$ を意味する.)

ベクトル解析

復習：方向微分

復習：2変数関数の方向微分可能性・方向微分係数の表示

\vec{u} を大きさ 1 のベクトルとする。

(i) $f(x, y)$ が偏微分可能で、偏導関数が連続ならば点 $A(a, b)$ における \vec{u} 方向微分係数は存在する。

(ii) u の成分表示を $u = (u_1, u_2)$ とすると

$$\lim_{s \rightarrow 0} \frac{f(P) - f(A)}{s} = u_1 f_x(a, b) + u_2 f_y(a, b)$$

である。

このことは 3 変数関数 $f(x, y, z)$, 空間のスカラー場 $f(P)$ についても成り立つ。

ベクトル解析

場の解析

スカラー場の方向微分

スカラー場 f の \vec{u} 方向微分係数を

$$\lim_{s \rightarrow 0} \frac{f(P) - f(P_0)}{s}$$

で定める。ただし

$\vec{u} = (u_1, u_2, u_3)$: 単位ベクトル.

s : 実数のパラメータ

$P_0(x_0, y_0, z_0)$, $P(x, y, z)$ は $\overrightarrow{P_0P} = s\vec{u}$ をみたす.

ベクトル解析

場の解析

スカラー場の方向微分と勾配

(i) スカラー場 $f(P)$ が (x, y, z) の関数とみて) 偏微分可能, かつ各偏導関数が連続であるとき, ベクトル \vec{u} 方向の方向微分は存在して

$$\vec{u} \bullet \text{grad} f(P_0) \cdots (*)$$

に等しい.

(ii) $\text{grad} f(P_0)$ は, \vec{u} を $|\vec{u}| = 1$ を満たしながら変化させたとき,

- ① 向きは f の P_0 における方向微分係数 $(*)$ が最大になる \vec{u} の向き
- ② 大きさはその時の方向微分係数の値

であるようなベクトルである。

このことは $\text{grad} f$ が座標系に依存しないことも示している。

ベクトル解析

場の解析

[確かめ] (i) は 2 変数の場合と同じ。(ii) は

$$\vec{u} \bullet \text{grad}f(P_0) = |\text{grad}f(P_0)| \cos \theta \quad (\theta \text{は } \vec{u} \text{ と } \text{grad}f(P_0) \text{ のなす角})$$

だから (*) は \vec{u} と $\text{grad}f(P_0)$ が同じ向きするとき最大値 $|\text{grad}f(P_0)|$ をとるから明らか.

ベクトル解析

場の解析

保存場とスカラーポテンシャル

\vec{A} : ベクトル場, f : スカラー場 が

$$\vec{A} = -\text{grad } f$$

をみたすとき,

\vec{A} は保存場である

f は \vec{A} のスカラーポテンシャルである

という。

ベクトル解析

場の解析

例 クーロン場のポテンシャル

スカラー場

$$f(x, y, z) = \frac{1}{r}, \quad (r = \sqrt{x^2 + y^2 + z^2})$$

はベクトル場

$$\vec{A} = \frac{(x, y, z)}{r^3}$$

のスカラーポテンシャルである。

ベクトル解析

場の解析

[確かめ]

$$\text{grad} f = \left(\left(\frac{1}{r} \right)_x, \left(\frac{1}{r} \right)_y, \left(\frac{1}{r} \right)_z \right)$$

であるが $r_x = \left(\sqrt{x^2 + y^2 + z^2} \right)_x = \frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2 + z^2}} = \frac{x}{r}$

$\left(\frac{1}{r} \right)_x = \left(\frac{1}{r} \right)_r r_x = -\frac{r_x}{r^2} = -\frac{x}{r^3}$ 同様に $\left(\frac{1}{r} \right)_y = -\frac{y}{r^3}, \left(\frac{1}{r} \right)_z = -\frac{z}{r^3},$

だから

$$-\text{grad} f = \left(\frac{x}{r^3}, \frac{y}{r^3}, \frac{z}{r^3} \right) = \frac{(x, y, z)}{r^3} = \vec{A}$$

ベクトル解析

場の解析

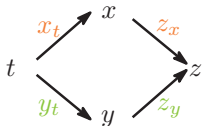
復習：2変数関数の合成関数の微分法 (続き)

(ii) $z = f(x, y)$: 偏微分可能かつ偏導関数が連続,

$x = \varphi(t), y = \psi(t)$: 微分可能

\implies 合成関数 $z = f(\varphi(t), \psi(t))$ も微分可能で

$$z_t = x_t z_x + y_t z_y \cdots (**)$$



だから同様に (P の座標を (x, y, z) として)

ベクトル場 $f(P)$ が x, y, z で偏微分可能かつ偏導関数が連続,

$x = x(t), y = y(t), z = z(t)$: t で微分可能

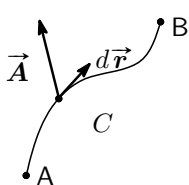
\implies 合成関数 $f(x(t), y(t), z(t))$ も微分可能で

$$f(P)_t = x_t f(P)_x + y_t f(P)_y + z_t f(P)_z \cdots (**)$$

ベクトル解析

場の解析

保存場の線積分



$$\vec{A} = -\text{grad } f,$$

C : 点 A から点 B に向き付けられた曲線

$$\Rightarrow \int_C \vec{A} \cdot d\vec{r} = f(A) - f(B)$$

(積分は途中経路によらない!!)

[確かめ] $C: \vec{OP} = \vec{r}(t), a \leq t \leq b$, 正のパラメータ $\vec{OA} = \vec{r}(a), \vec{OB} = \vec{r}(b)$

$$\text{左辺} = \int_a^b \vec{A}(\vec{r}(t)) \cdot \frac{d\vec{r}(t)}{dt} dt = - \int_a^b \text{grad } f(\vec{r}(t)) \cdot \frac{d\vec{r}}{dt} dt$$

$$= - \int_a^b (f(\vec{r})_x x'(t) + f(\vec{r})_y y'(t) + f(\vec{r})_z z'(t)) dt$$

$$= - \int_a^b \frac{df(\vec{r}(t))}{dt} dt = - [f(\vec{r}(t))]_a^b = \text{右辺} \quad (F(P) \text{ を } F(\vec{r}) \text{ などと書$$

いた)

ベクトル解析

場の解析

ベクトル場の発散

ベクトル場 $\vec{A}(P) = (A_1(x, y, z), A_2(x, y, z), A_3(x, y, z))$ に対して

スカラー場 $\frac{\partial A_1}{\partial x}(x, y, z) + \frac{\partial A_2}{\partial y}(x, y, z) + \frac{\partial A_3}{\partial z}(x, y, z)$

を \vec{A} の発散 (divergence) という。

記号 $\text{div}\vec{A}$, $\nabla \cdot \vec{A}$, ... であらわす。

ベクトル解析

場の解析

[例：クーロン場の発散]

$$\vec{A}(P) = \frac{(x, y, z)}{r^3} \text{ のとき}$$

$$\operatorname{div} \vec{A}(P) = \begin{cases} 0, & (P \neq 0) \\ \text{定義できない}, & (P = 0) \end{cases}$$

ベクトル解析

場の解析

[$\text{div}\vec{A}$ の本質：点 P での湧き出し率]

点 P を含み、座標軸に平行な辺をもつような立方体 E をとるとき、

$$\frac{1}{V(E)} \iint_S \vec{A} \cdot \vec{n} dS \longrightarrow \text{div}\vec{A}(P)$$

\longrightarrow は E を 1 点 P に縮めていったときの極限、

S は E の表面に外向きに向きを付けたもの、

\vec{n} は外向き単位法線ベクトル、

$V(E)$ は E の体積。

ベクトル解析

場の解析

ガウスの発散定理

G を空間の有界閉領域, S を G の表面に外向きに向き付けたもの, \mathbf{n} を S の外向き単位法線ベクトルとし $\mathbf{A} = (x, y, z)$ を連続微分可能なベクトル場とする. このとき

$$\iint_S \vec{\mathbf{A}} \cdot \vec{\mathbf{n}} dS = \iiint_G \operatorname{div} \vec{\mathbf{A}} dx dy dz$$

が成り立つ.